『わたしたちの歴史　日本から世界へ』

目　次

巻頭資料　歴史の舞台

東アジア
南アジア・東南アジア
西アジア
ヨーロッパ
アメリカ大陸／アフリカ大陸

歴史の扉

1　歴史と私たち　学校の歴史
2　歴史と資料　学校給食の歴史

第１部　近代化と私たち

近代化への問い
①交通と貿易／②産業と人口／③権利意識と政治参加や国民の義務／④学校教育／⑤労働と家族／⑥移民
1　18世紀の世界とアジア
考えてみよう！　琉球と蝦夷地
2　産業革命
3　アヘン戦争と日本
4　日本の開国
考えてみよう！　江戸時代
5　日本開国期の国際情勢
6　開国後の日本社会
7　市民革命と国民統合
考えてみよう！　国民国家と多民族国家
8　明治維新
9　富国強兵と文明開化
10　日本の明治初期の外交
11　大日本帝国憲法の制定
12　日本の産業革命と日清戦争
13　帝国主義
14　日露戦争と韓国併合
いまの私たちにつながる課題
［自由・制限］どっちがお得？　自由貿易と保護貿易
［対立・協調］意見がぶつかるのも前に進むため？

第２部　国際秩序の変化や大衆化と私たち

国際秩序の変化や大衆化への問い
①国際関係の緊密化／②アメリカ合衆国とソ連の台頭／③植民地の独立／④大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化／⑤生活様式の変化
1　大衆運動の芽ばえ
2　第一次世界大戦
3　第一次世界大戦と日本
4　ロシア革命とその影響
5　社会運動の広がり
6　国際協調
7　アジアの民族運動
8　大量生産・大量消費社会
考えてみよう！　大衆文化としてのスポーツ、野球
考えてみよう！　大衆文化としての映画
9　世界恐慌
10　独裁勢力の台頭
11　日本のアジア侵出
12　第二次世界大戦
13　第二次世界大戦と日本
14　第二次世界大戦の終結
15　戦後国際秩序
16　冷戦の始まり
17　日本の戦後改革と日本国憲法
18　日本の独立
いまの私たちにつながる課題
［統合・分化］１つの民族＝１つの国家？
［平等・格差］歴史のなかで女性は？

第３部　グローバル化と私たち

グローバル化への問い
①冷戦と国際関係／②人と資本の移動／③高度情報通信／④食料と人口／⑤資源・エネルギーと地球環境／⑥感染症／⑦多様な人々の共存
1　第三世界の登場
2　冷戦の固定化と「雪どけ」
3　冷戦の展開
4　55年体制と安保闘争
5　高度経済成長の光と影
6　ベトナム戦争とアメリカ
7　経済構造の変化
8　日本の経済大国化
考えてみよう！　日本の政府開発援助
9　アジアの経済成長
10　社会主義の停滞と新自由主義
11　冷戦の終結
12　冷戦後の地域紛争
考えてみよう！　国連平和維持活動
13　地域統合
14　現代世界の諸課題
15　日本の諸課題
いまの私たちにつながる課題
［対立・協調］激動の時代、命をかけて平和をつくった人々！
［開発・保全］地球は、そして私たちは、どこへ向かうのだろうか？！

特徴紹介

津野 雄彦

新科目「歴史総合」の教科書『わたしたちの歴史』の特徴を紹介する。

「歴史総合」は現代に生きる生徒が近現代の日本と世界の歴史を学ぶなかで、様々な事象について理解・考察し、より良い社会の実現を目指していく科目である。本教科書は従来の世界史Aと日本史Aの内容を合わせたものではなく、歴史の新しいとらえ方を提示している。

“学びたい”という気持ちを育てる

本教科書は教員が授業で扱いやすく、生徒も学習しやすいように見開き（2ページ）で1テーマが完結する構成とした。テーマは近現代史のポイントを押さえたものに厳選し、かつ近現代の歴史の流れがつかめるようにしている。

本文は難しい用語等の使用を避け、わかりやすい記述を心がけた。テーマごとに「テーマの問い」を1つ設定したほか、一部の資料にも問いを設定し、必要に応じて選択肢を設けるなど、生徒が取り組みやすい工夫をほどこしている。これらの本文や問いによって、生徒が時代の特色や現代とのつながりなどにアプローチしやすくなっている。

冒頭の「歴史の扉」では、学校や学校給食の歴史など生徒と関わりの深いものをとりあげた。

これらにより、生徒は歴史を単に覚えるものから、現代とのつながりなどを考えていく材料になるものととらえられるようになる。より身近に歴史を感じ、自ら“学びたい”という気持ちを育てることができるであろう。

資料を豊富に盛り込み、思考力を育む

本教科書を開いてみたときにまず感じるのは、写真や地図などの資料の大きさ・多さではないだろうか。1テーマ1時間という限られた時間で完結させることを想定し、文章量をしぼった。その代わりに資料を多く配置して、その資料にキャプションだけでなく適宜問いをつけることで、テーマについての理解を助け、生徒が興味・関心をもてるようにした。

「近代化への問い」など各部の初めの問いや各部の最後にある「いまの私たちにつながる課題」でも、文字資料や絵画・グラフ・表などの資料を掲載し、生徒の歴史的思考力を育てられるよう工夫した。どちらもグループワークや議論などのアクティブ・ラーニングにも活用できる。

学習する側・教える側、双方の利点をもつ

これまで述べたように、扱うテーマの厳選・本文の読みやすさ・視覚的な見やすさが本教科書の大きな特色である。これらに加え、身近な要素、考察を促す問いなどにより、生徒は内容を深めつつ、楽しく歴史を学習できるであろう。また、教員にとっては限られた時間数で指導するにあたって、心強いものではないだろうか。歴史が専門ではない教員にも使いやすいはずである。

そのほか、巻頭の「歴史の舞台」で世界の諸地域を概観できるようにした。中学校までの内容や地理学習とも関連付けながら、学んだことを高校での歴史学習につなげたい。また巻末に「用語解説」を設け、教える側の立場から是非理解してほしい言葉について説明してあるので、適宜活用してほしい。

本教科書の学習をもって、高校での歴史学習を終える者、一方で日本史探究・世界史探求へと進む者、さまざまな進路があることを想定している。いずれの学習者にとっても、本教科書を活用することで歴史の新しいとらえ方を身に付け、将来に役立ててほしいと願っている。

（つの・たけひこ／前東京都立戸山高等学校教諭）

グローバル化への問い
――酸性雨から考察する

安田 智昭

歴史総合は学習指導要領上、「A　歴史の扉」「B　近代化と私たち」「C　国際秩序の変化や大衆化と私たち」「D　グローバル化と私たち」の４つの大項目で構成されている。そしてB～Dについては、各大項目の学習のはじめにテーマに関する問いを表現し、それぞれの大項目のまとめとして「現代的な諸課題」の考察をおこなうことが求められている❶。本稿は、Dの導入として、「資源・エネルギーと地球環境」を題材に「グローバル化への問い」を立てる授業の一例を示すものである（教科書『わたしたちの歴史　日本から世界へ』p.122参照）。授業時間は１時間を想定している。

今や、あらゆる環境問題は国際社会が協調して地球規模で対処するべき課題となっている。越境大気汚染、地球温暖化、海洋プラスチックの問題などからわかるように、我々の経済活動や生活様式は、たとえ意図しないものであったとしても、世界のほかの地域に住む人々に様々な影響を与えてしまう。その意味で、環境問題はグローバル化を考えるためのよい題材となる。

なかでも酸性雨を取り上げる意図としては、以下の３点があげられる。第一に、1960年代以降ヨーロッパで深刻な被害をもたらしたものの、その後の各国の努力で現在は状況が改善しつつある点に注目した。その過程も含めて扱うことで、地球温暖化のような現状では明るい見通しをもてない問題についても、考えるヒントが得られるかもしれない。第二に、ヨーロッパで問題の解決に向けた国際協調の枠組みが形成された背景に、1970年代のデタントの影響が指摘できる点〔高橋2017〕に注目した❷。冷戦の展開を学んだ後で、改めてここで立てた問いの答えを考えると、理解が深まることが期待される。そして第三に、酸性雨はヨーロッパのほか、北米や東アジアなどでも問題となったことに注目した。それぞれの地域で同じような問題がおこりつつも、問題への取り組み方には差異がみられることから、生徒に高度な問いを立てさせることも可能であると思われる。

授業の導入――そもそも酸性雨とは

授業の導入では、そもそも酸性雨とは何かを確認しておかなくてはならない。酸性雨という言葉を聞いたことがあるかを尋ね、どのような影響があるか知っていることをあげさせてもよい。ただし、2000年代以降は報道で取り上げられる頻度が減っており❸、問題そのものを知らないこともありうる。その場合は、酸性雨という言葉にどのようなイメージをもつか、答えさせればよい。そのうえで、一応の定義を以下の教科書の図で説明する❹。

酸性雨

化石燃料（石油や石炭など）の燃焼や火山活動などで放出された硫黄酸化物や窒素酸化物が大気中で化学反応をおこし、硫酸や硝酸となって雨や雪、霧などにとけて地上に降り注ぐ現象。河川や湖沼が酸性化して生き物が死滅したり、森林が枯れたり、生態系に大きな被害をもたらすほか、コンクリートをとかしたり、金属を錆びつかせたりして建造物や文化財にも大きな被害をもたらす。

ヨーロッパにおける酸性雨の被害については、酸性雨の影響でとけた石像の写真などを見せながら、**図1**を示して説明を加えるとよいだろう。

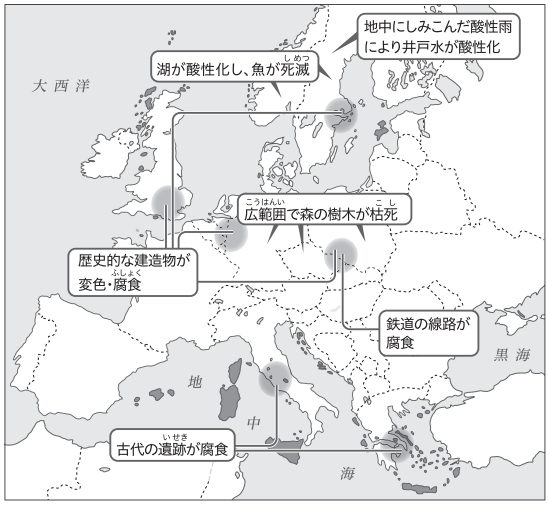

図1　ヨーロッパにおける酸性雨の被害（1960～80年代）

こうして酸性雨の概要を説明した段階で、現時点で疑問に感じたことがあるか、生徒に問いかけたい。「こうした被害はいつからみられるのか」❺「石像がとけるにはどれくらいの時間がかかるのか」「酸性雨の影響が**図1**で示した地域に現れたのはなぜか」といった程度の疑問が出れば、それでよいと思われる。この段階では、授業内で話しやすい雰囲気をつくることが大切である。

授業の展開1――酸性雨の問題化

燃料源を石炭に頼っていたイギリスでは、産業革命以来、大気汚染の問題が長く続いた。ロンドンでは19世紀後半以降、たびたびスモッグ（smog、smokeとfogの合成語）が発生し、1952年12月には「グレート・スモッグ」と呼ばれる大気汚染事件がおこった〔石1992〕❻。数日間にわたり、黒い霧で町全体が薄暗くなり、視界不良のために交通渋滞が発生した。呼吸器の異常を訴える患者で病院は混雑し、死者も増えていった。そして、スモッグが晴れたあとには、強い酸性（ph1.4～1.9）を帯びた雨や霧が発生し、数ヶ月にわたって老人と乳幼児を中心に4000人以上が気管支炎や心臓発作で死亡した。

その後、スモッグの発生源とみなされた石炭火力発電所への抗議運動がおこり、イギリスでは1956年に大気清浄法が施行され、煤煙の排出は規制された。しかし、酸性雨の原因となる硫黄酸化物など、目に見えない有害物質は排出されつづけた。また、近隣住民の抗議を受けて発電所には高層煙突が設置されたが、その結果、排煙は偏西風に乗って遠くまで運ばれることになった。これは、1960年代以降、北欧で発生した酸性雨被害の一因となったと考えられている。

もっとも、実際の授業では上記の内容の説明を省略し、**図1**にもとづく問いかけののち、すぐに以下の分析に取り組むとよいだろう。**表1**は酸性雨の原因となる硫黄酸化物について各国の排出量を、**表2**は1次エネルギーについて各国の消費量を表している。

（単位は千トン）			
	1995年	2005年	2015年
イギリス	2,454	773	250
イタリア	1,323	410	125
ギリシア	492	549	84
スウェーデン	69	36	18
チェコ	1,059	208	129
ドイツ	1,747	472	343
ノルウェー	34	24	17
フランス	960	461	163
ポーランド	2,141	1,172	711
アメリカ	16,882	13,145	3,279
日本	1,203	1,011	702

表1　各国の硫黄酸化物の排出量

（単位は100万石油換算トン）			
	1995年	2005年	2015年
イギリス	214	227	194
イタリア	162	184	152
ギリシア	27	34	27
スウェーデン	50	50	53
チェコ	41	44	41
ドイツ	333	324	323
ノルウェー	41	45	47
フランス	236	262	242
ポーランド	96	92	95
アメリカ	2,120	2,337	2,227
日本	494	525	453

表2　各国の1次エネルギーの消費量

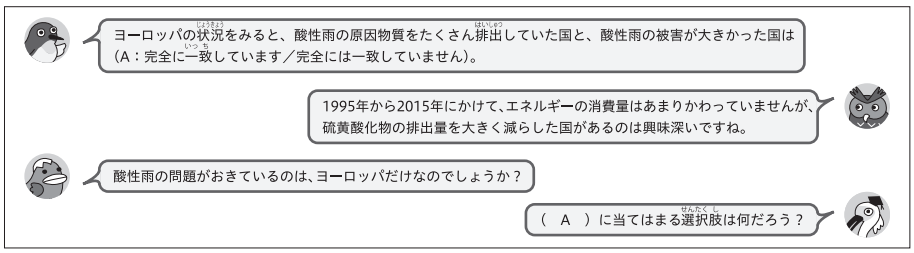

図 2

まずは、それぞれの表から読み取れることを挙げさせる。着目すべき点がわからない場合は、教科書の上記のコーナー（**図 2**）も参考になる。

表の読み取りは、生徒どうしの学び合いをうながすため、グループ学習の形でおこなうのもよい。また、各国の位置があやふやな生徒が多いことを考慮して、必要に応じて地図帳を参照させたい。

表 1 からは、酸性雨の一因である硫黄酸化物の排出量について、①ポーランドを例外としてアメリカ・イギリス・ドイツ・日本などいわゆる先進国の排出量が多いこと、②一方で北欧諸国の排出量は少ないこと、③排出量が少ないスウェーデンで湖の酸性化がおこるなど、酸性雨の原因物質を排出する国と、その被害を受ける国は必ずしも一致しないこと、④各国とも年代を追うごとに排出量を削減できていることなどを読み取りたい。

表 2 からは、①先進国ほど１次エネルギー消費量が多いこと、②各国のエネルギー消費量について、漸減させている国もあるが、あまり劇的な変化は見受けられないことなどを読み取れるとよい。そして、２つの表を組み合わせることで、エネルギー消費量があまり変化していないのに、硫黄酸化物の排出量を大きく減らしている国があることもみえてくる。そして、それぞれの発見について、「なぜそうなっているのか」という問いを立てられれば、この時間の目標はほぼ達成される。

資料の読み取りは、問いを立てる前提となるため、多めに時間を配分しておきたい。正確な読解や理解なくして鋭い問題設定はありえない。この授業に限らず、折に触れて史資料の読み取りの訓練をさせることが重要である。

授業の展開 2 ――国際協調の形成

つぎに、ここまでの授業で得られた問いをさらに発展させることを試みたい。一例として、各国の硫黄酸化物排出量が減少傾向にあることの背景として、ヨーロッパでは国際協調の枠組みが形成されたことを指摘したうえで、なぜ国際協調が可能になったのか、と考えさせる方法がありうる。

北欧で湖沼の酸性化が急激に進んだのは1950年代末以降のことであった。原因を究明するべく研究がおこなわれ、1968年、スウェーデンの科学者オーデンが、北欧の酸性化被害にはイギリスやドイツなど西欧諸国から排出される大気汚染物質が大きく関係していると指摘した。これを受けて北欧諸国では長距離越境大気汚染に関する調査が進められた。スウェーデンは1972年の国連人間環境会議の場でこの問題を取り上げ、各国が共同して大気汚染の防止や硫黄排出量の削減に取り組むことを求めた。

汚染物質の排出国として名指しされたイギリスやドイツは、この時点ではこのような取り組みに消極的であったが、結局、1979年に長距離越境大気汚染条約が採択された。この条約は、当初スウェーデンやノルウェーが希望したような、硫黄酸化物の具体的な削減義務を定めた拘束力のあるものとはならなかったが、今後の各国の協調の枠組みを定めたという点で重要なものである。

以上をかいつまんで説明し、国際協調の枠組みが形成されたのはなぜか、という問いに結び付けたい。今回の授業では考察まではおこなわないが、以下、この問いを考えるポイントを示しておく。

条約締結にあたって重要な役割を果たしたのは、ソ連や東欧諸国であった。拘束力のある条約を結びたい北欧諸国と、条約を時期尚早と考える西欧諸国が対立する中で、東側諸国は北欧支持に回った。その背景には、ソ連も西欧諸国由来の硫黄沈着を懸念する点で北欧と利害が一致したことに加えて、1970年代のデタントがあった。1975年、全ヨーロッパ諸国とアメリカ・カナダが参加して全欧安全保障協力会議(CSCE)が開催された。この会議で採択されたヘルシンキ最終合意では、信頼醸成や軍備縮小と並んで環境の領域における協力も取り決められた。そして、その中でもっとも具体的なプロジェクトとして掲げられたのが、長距離越境大気汚染監視・評価プロジェクトであった。その意味で、長距離越境大気汚染条約はデタントの産物であったといえる。

1980年代に入ると、イギリスでは、サッチャー政権の下で石炭産業の民営化が進められるとともに、北海油田の開発を背景に石炭からガスへのエネルギー源の転換がなされた。ドイツでは、国内で緑の党の影響力が増した。かくしてイギリスやドイツの態度が軟化し、1985年には硫黄酸化物の排出削減を定めたヘルシンキ議定書が採択された。冷戦終結以後は、中欧・東欧諸国がEUへの加盟要件を満たすために環境政策の整備に力を入れたことで、越境大気汚染対処にむけた国際協調体制はさらに深化することになった❼。

一方で、東アジアでは、1998年に東アジア酸性雨モニタリングネットワーク(EANET)が設立された(本格稼働は2001年以降)が、国家間の条約調印や枠組みの形成には至っていない。この点も、なぜかと考えれば、問いになりうる。

本時のまとめ

最後に、この時間で立てた問いを整理することで、授業のまとめとする。本時は問いを立てることが目標であり、問いの考察については充分におこなうことができない。しかし、その時々の国際情勢や地域の事情などの歴史的な背景も加味して考えることで、環境問題を多面的にとらえることが可能となるということが生徒に伝われば、意味のある1時間になると思われる。

❶とくに「D　グローバル化と私たち」の最後では、「現代的な諸課題の形成と展望」として、歴史総合で学んだ内容すべてをふまえて各自で主題を設定することが求められている。

❷本稿の「授業の展開2」はこの研究に依拠した内容である。

❸酸性雨の問題が解決したわけではなく、研究が成熟し、地域社会が冷静になったことが指摘されている〔藤田2012〕。

❹森林被害については、乾燥など別の要因もあり、必ずしも酸性雨だけが原因とは断定できないようである〔村野1993〕。

❺久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』に、イギリスのアルカリ産業(ソーダ工業)について述べた記述がある。実際の授業で扱う必要はないが、酸性雨問題の始まりを知る上で興味深い。

> 殊ニ曹達ト「コロール」ト二品ハ、各製作ニ大益アリ。石鹸ヲ製シ、玻璃ヲ煉リ、布帛ヲ晒シ、染房ヲ美ニスル等、枚挙シ難シ。以前ハ西洋ニ曹達ノ大用ヲシレトモ、未タ「コロール」ノ大用ヲ発明セス。故ニ曹達の製造場ニテ、塩ヲ煅烙シ、硫酸ヲ注キテ、「コロール」ヲ分離セシムレハ、其「コロール」ハ硫酸ノ水ニ和シ、「コロール」水素瓦斯トナリ、緑烟ヲ散シ、近傍ノ人畜草木ヲ傷害スルニヨリ、烟突ヲ築クコト四百尺ノ上ニ及フモ、其害ヲ除クニ至ラス。

曹達とはソーダ灰(炭酸ナトリウム)のことであり、石けんやガラス、染料など多くの化学産業で必要とされていた。食塩と硫酸からソーダ灰を合成する過程では「コロール」すなわち塩化水素ガス(塩酸)も発生してしまう。しかし、当時のイギリスでは塩酸の有効な利用法はなかった。そのため、塩酸は緑煙となって近隣の人々や家畜、草木に被害をもたらしていた。塩酸が原因であるという点で現在の酸性雨とは少々異なるが、これが酸性雨問題の始まりとされている〔石1992、藤田2012〕。

❻グレート・スモッグやその後のイギリスの動きについては、この研究に依拠した説明である。

❼ヘルシンキ議定書以後は、窒素酸化物の排出削減を定めたソフィア議定書(1988年)、硫黄酸化物のさらなる削減を定めたオスロ議定書(1994年)、硫黄酸化物・窒素酸化物・アンモニア・揮発性有機化合物の排出削減を定めたヨーテボリ議定書(1999年)などが合意されている。

主要参考文献

石弘之『酸性雨』(岩波書店、1992年)
髙橋若菜『越境大気汚染の比較政治学』(千倉書房、2017年)
藤田慎一『酸性雨から越境大気汚染へ』(成山堂書店、2012年)
村野健太郎『酸性雨と酸性霧』(裳華房、1993年)

(やすだ・ともあき／三輪田学園中学校・高等学校教諭)